

第 14. 江戸の出版 本屋の日記から

はしぐち 橋口
こうのすけ 侯之介



京都・風月庄左衛門の日記

江戸時代の初期・寛永期から続く伝統ある京都の本屋・風月庄左衛門(ふうげつしょうざえもん)の当主が書いた『日暦』という名の日記が残っている。明和9年9月(11月に改元して安永元年、1772)から翌安永2年12月までの1年3ヶ月分の日記である。江戸時代中頃の本屋の日常的な活動ぶりがわかって興味深い。

風月は京の「書林十哲」のひとつで、名門である。

当人は安永元年に初めて子が生まれるなど、まだ二十代後半と思われる若さで、祖父の沢田一斎が隠居しながら後見していた。一斎は中国小説の研究家としても知られた学者肌で、本にも詳しい。

それが本屋の業務や私生活まで交えて詳しく日々の出来事を記した。

出版は業務の一部

それを見ると、江戸期の本屋は、現代の出版社のように、間断なく新本を出し続けるという仕事とは違う。『日暦』にはじっくり醸成していくように本をつくる過程が示されている。さらに、日常の業務として帳面の整理や、唐本・古本、さらに書画の仕入れと広範な業務の様子も描かれている。住まいの仮移転、出版企画に類板の苦情がきたことへの対応、使用人のおこした不祥事の裁きなど難儀なことも書いてある。

本屋同士のつきあい

江戸期の本屋は、同業者の横のつながりが密接だった。親しい本屋同士で「講」を組み、そこでさまざまな活動をする。講というのは、本屋に限らず中世からあった人々の結びつきの単位で、多くは信仰を共にする関係で結ばれた。また、資金を融通し合い、一種の金融でもあった。江戸時代はもっぱら親睦が目的で、酒食を共にした。

本屋仲間も講から発展したもので、京や大坂の本屋全体が入る集団である。そのもとで、さらに小さな単位で有志が集まる講がいくつもできた。そこでは、親睦を兼ねて資金を出し合い板木を買うことが多い。その本が売れると配当があった。日記によるとこんな感じで参加していた。

明和九年九月十八日 日吉講 先々代からの講で、日吉神社の信仰からきている。升屋伊兵衛という店に8軒が集まり、会食しながら古書の市を開いた。講は午前中から夜まで続き、この日は四つ半というから10時半頃散会した2ヶ月に一度開く。

九月十九日 大黒講 料亭・湖月で開く。大黒様の信仰によるが、実際は板木の共同購入の集まり。7軒が常連。この日も俳諧の本と漢字の辞書の他店の板木を2貫800匁(およそ45両、80万円位になる)で買った。以前買った本の配当が一軒あたり735匁(12両1分、200万円位)あった。この講は配当もいいため入会希望者も多い。この日も2軒あったので、新規入講には270匁(4両2分、80万円位)かかるむね説明した。年に2、3回。

九月二十四日 永代講 故人の供養のため、永続して寺院で説教を受けるのが一般だが、風月らの講はつねに松葉屋で開き、この日は夕食の献立に汁(鱈)、猪口(キノコ的一种)、ねぎ、半平、あじの焼き物が出たという。毎回夜半に帰る。講のメンバーは何人かは日吉講や大黒講と同じだがそれとは異なる店も参加する。漢籍『通鑑綱目』の板木162枚をある本屋から購入した。年に5回開き、一度は一同で伊勢に参拝した。ただし風月は参加しなかった。

十月三日 報恩講 寿司屋で年に2回ほど開く。内容はわからない。

十一月二日 夷講 頻繁に行われる本の古書市。忙しいときは番頭に行かせた。

十二月二日 伊勢講 風月が講の会主を勤める。こども板木の持ち合いを目的としており、その目録をつくったとある。

安永二年二月十三日 万歳講 この講も市を実施する集まりで、良い品がでる。

出版はそう多くない

日記には出版に関する記事も多いが、ほとんどはこれから数年後に出る本の制作作業である。この日記の期間中に刊行した本は、年に2点程度。

明和9年	永平衆寮箴規 ^{しんぎ}	道元著・面山瑞方校
	世説鈔撮,	大典顕常著 宝暦十三年刊の後印
安永2年	日本書紀通証	谷川士清著 宝暦板の後印 風月らが売りさばき
	女科摘要	婦科摘要 秋田屋平左衛門らと相合板

『日本書紀通証』の明和9年10月1日の記事

谷川順迪^{つうしよ}入来、昼飯酒出ス。通証纂要立直六拾五目。売弘三軒、五十八目、谷川板賃十五匁、日本紀積日本紀六匁、風月へ三匁、元入廿八匁、三匁奉納、三匁仕入日払、印合五十八匁。谷川夜半迄

この本は、伊勢の谷川士清が宝暦12年（1762）までに自力で板木を彫り、同年11月に完成した。しばらく私家版として売った。それを町版として流通網に乗せるために風月の店を通して、本屋仲間の許可をとった。それを増刷するのにさいしての細かな金銭のことがこの日記で決められた。

谷川順^{じゆんてき}迪とあるのは谷川士清本人、夜半まで酒食でもてなした。

一般への売値である建値（日記では立直）は銀65匁とし、売り弘めの本屋（問屋の役を果たす。ここでは三軒）へは58匁で仕切る。

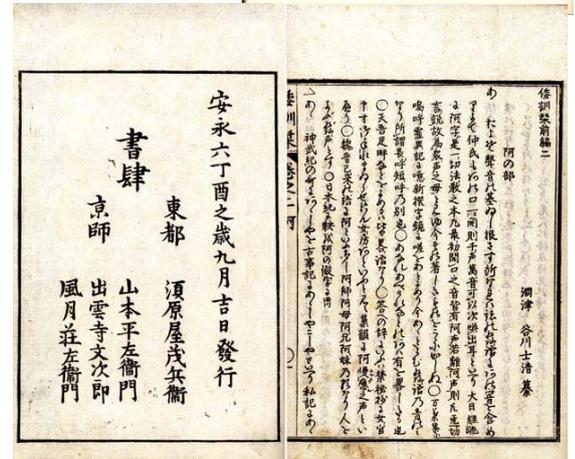
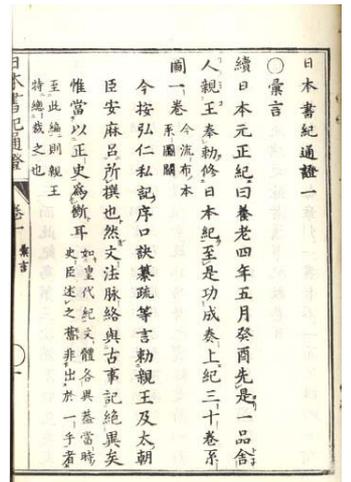
利益の配当にあたる板賃として谷川には15匁渡す。風月の取り分は3匁。谷川側に板木の所有権があるからだ。一セット売れるたびに15匁の印税が入るようなものだ。

「日本紀積日本紀六匁」というのは先行出版物『日本書紀』『積日本紀』の板株を持っている店に各三匁ずつ差し出すもので、いわば類板の代価である。

また元入二十八匁とあり、これが刷りや仕立代、紙代などの諸経費。このほかに「三匁奉納」とあり、おそらく蔵板として名前を借りた京都の五條天神のことではないかと思う。京都の本屋が新刊を奉納する北野天神という可能性もある。江戸時代の慣習である。

また「三匁仕入日払」とあって、商習慣として現金払いのときには三匁値引くということかもしれない、などまだよくわからない未解明の支出が項目としてあげられているが、これら諸費用を合計するとたしかに五十八匁になる計算である。

その後、谷川とは次の出版物（日本語辞書の『倭訓栞』^{わくんのしおり} 右図）の刊行準備に入り、醸成するようにしっかりと本づくりをしていく様子が日記からうかがえる。



往生する類板問題

風月を中心に鮫八（鮫屋八兵衛）、丸市（丸屋市兵衛）との相合で出版の計画をしていた『尚書注疏』^{しょうしよちゆうそ}は難儀した。「書経」の各種古注に唐の孔穎達^{くえいたつ}がさらに注釈を加えたものの和刻本である。安永2年2月には校訂刷りまでできていた。ところが京都の同業者・吉田四郎右衛門から、自分のところに板株がある『五経大全』中の「尚書大全（書経大全）」の類板になると差構（さしかまい）類板の疑いがあると苦情を申し立てることをしてきた。

秋平、村上入来、書経疏吉田大全五経ニカマイ（構）ノ由御尊、酒出ス、疏ハ大全ニカキリ申由、集注ニハ無レ之よし

他の本屋（仲間行事）が来て、注疏の中に大全と同じ注の箇所があるといってきたという。

それに対して風月側は、注疏は唐代に古い注を集めたもので、宋の朱熹による集注もその同じ注を多く引用している。集注本（当時これは類板にあたらないとされていた）が問題ないのに、それより古い注疏を訴えるのはおかしいと反論した（三月一日）。本屋仲間の行事がとりもって、結局、「十割ノ一軒ヲ吉田へ遣シ」と、十分の一の板株を与えるかわりに、吉田は、以後、大本本をたてに差構をしないこと、摺り立て（増刷）は風月・鮫八・丸市の三軒だけが行なうことを条件にしてまとめた（4月6日）。本は四年後の安永六年によりやく刊行された。

尾張藩への大量納入と通販

永く文化の中心だった京都は、さすがに書物も厚く蓄積されてきた。それに比べると、名古屋は歴史がまだ浅い。しかし、確実に書物の需要は拡大していった。そこに京都の本屋が進出する。風月孫助という支店を設けていた、孫介は名古屋での書籍販売で力を持ち、尾張藩から大量注文を得るようになった。京都の老舗の系列店という背景と、孫助らの日頃からの地道な活動があって、人脈と信用を築いていったからだと考えられる。

尾張藩の大規模な収書活動が『日録』に、「**安永二年六月十二日 孫助状来ル、当時唐本御買上ケ始リ、珍書下シ可申由申来ル**」と唐本買い上げが始まったので、珍書をできるだけ送ってほしいという孫助からの手紙で始まった。

さっそく京都からこれまで収集しておいた**古本の目録**が送られる（6月16日）。すると、すぐに注文が入って、送本した。一ヵ月もしない7月6日には「**尾州登リ金七十両着**」とあり、もう入金が始まる。翌日、その二日後も入金する。この最初の納本で少なくとも200両が京都に送金されてきたのだ。

ほかにも各地の顧客に目録を送って注文をとっていた。通販は江戸時代からあった商法だったのだ。自力の出版だけでは大きな利益は出ない。この日記の期間中最も大きな売上はこの通販だった。

このときの尾張藩の収集は、天明3年に開校した藩校・明倫堂の「**図書室**」となった。

古本在庫の管理もきちんと

唐本、和本、書画、板木ともども公私の市場や、店での直接の買い入れ、地方出張などを通して仕入れられた古本が多い。『日暦』を見ると在庫調査をきちんとこなして、帳面に残していく様子が実施された日ごとに載っている。

この店では、新本、古本、唐本がそれぞれ区分けされて保管されていて、その置かれた場所ごとの商品在庫調査や、帳面の整理をこまめに実施している。

明和9年11月22日、23日には、東蔵と店内の「**古本合**」^{あわせ}と**いって**古本部門の調査をし、同月29日に内蔵の「**唐本合**」を、12月1日には東蔵三階の、同二日に東蔵二階下の「**唐本合**」を実施している。さらに写本についても「**書本合**」^{かきほんあわせ}をおこなっている。これらは、置いてある場所と部門ごとにおこない、最後に全店を「**有本総合**」^{ありほんそうあわせ}としてまとめていく。店二階にも大棚があり、さらに二階建ての内蔵がある。東蔵は三階建てで古本・唐本がぎっしり詰まっているようだ。下蔵というものもあって、ここまでは店の敷地に建てられた蔵だと思われる。そのほかに南店、西店、半紙店というのもあり、別の場所に支店、あるいは半紙を売る店があったと見られる。在庫商品の大半は古本だったのだ。

佐伯文庫の収集

豊後・佐伯藩は二万石程度の小藩だったが、8代藩主・高標は、製紙事業の推進などで藩財政を立て直す一方、学業を奨励し、書籍の収集を積極的に進めた。その結果、天明4年（1784）になって蔵書8万冊からなる「佐伯文庫」が整った。漢籍のほかに史書・仏書・天文・数学・医学などに及ぶ広い分野に及び、国書もさることながら唐本の善本が多く、宋・元版まで含まれていた。

高標はほうぼうから本を購入したといわれているが、京都で書店から購入したものが、幅の広いジャンルに及び、善本が手に入った。その京都での購入する係として荒川文之丞なる藩士を派遣した。実際、よく吟味しながら、かなり高価な本を買っている。最良の顧客でもあるので、風月は贈り物をしており、暮れには「**荒川へ寒気見舞、生たら一遣ス**」など出てくる。

たとえば閏三月六日「**義八昼後荒川へ両度行、経解ノ事也、二度メハ経解ミセ持参ノ由**」

同三月十二日「**荒川より経解見セ本帰ル、明日不足之品書は被遣由申来ル**」毛利高標本にある『九部経解』（明万暦刊、六十六冊）であろう。見せ本というのは、良いと思われる本を顧客に預け、良いとなれば購入、いらぬなら返品してもらう商法で、江戸時代ではよく行われた。

五月三日「**荒川行、拙〔者〕義八見セ本、唐本目録、同直付三十品**」とあり、見せ本と古書目録で売り込みをした。その結果、ほとんど買い上げとなった。

佐伯藩は、この日記の中では尾張藩に次ぐ、よい売上となった。

参考文献

弥吉光長『未刊史料による日本出版文化1』昭和63年、ゆまに書房

〃 『江戸時代の出版と人』昭和55年、日外アソシエーツ